

季節風

北海道医報購読料年間3,000円。北海道医師会員にあっては会費の中に含まれています。

涙そうそう

情報広報部長 中川 俊男

「古いアルバムめくり ありがとうって呟いた
いつもいつも胸の中 励ましてくれる人よ」と
始まる歌がある。沖縄出身の歌手、夏川りみの
「涙(なだ)そうそう」というヒット曲だ。ある
テレビ番組で、「この歌を聴くたびに、先立った主人が励ましてくれているような気がして元気が出る」という年配のご婦人が紹介されていた。それぞれの人生に癒され励まされる歌があるとの解説で柄にもなく郷愁に耽ったのだが、それと同時に、中小零細企業の経営者の自殺が激増していることが頭をよぎった。生命保険金を資金繰りに充てようというもので、文字通り命を懸けて従業員や残される家族を守るための「究極の決断」であろう。日本人にはまだ武士道が残っているのかと驚かされる。その是非は別として、一方で政府は日本固有の文化を市場原理という暴力で次々に破壊しようとしている。改革という言葉こそ耳当たりはいいが、改革すべきものと守らなくてはならないものとを峻別しなければ、そこにあるのは破壊だけになってしまう。竹中平蔵大臣は「努力したものが報われる社会を作りたい」と強弁するが、米国型の「勝った者がこれまで以上に報われる弱肉強食の世界」を実現したいという本音が覗く。

★ ★ ★

マニフェスト選挙と言われた総選挙が、与党の勝利という形で終わり小泉総理は益々自信を深めた。護憲を唱えてきた社民党は壊滅的に敗北し、それを象徴するかのよう政府は自衛隊のイラク派遣を決めている。この政府の米国におもねる外交姿勢は、今後100年にも亘って禍根を残すものになるだろう。元自衛隊幹部の「自衛隊入隊希望

者が激減し、日本における徴兵制の復活に繋がりがかねない」という警鐘は説得力を持つものだ。将来、歴史を振り返った時、小泉総理の誕生はわが国にとって取り返しのつかない選択だったかもしれない。

★ ★ ★

現実を見よう。景気回復の最大の課題である個人消費は一向に回復しない。ところが、1400兆円をはるかに超えるわが国の個人金融資産は、前世紀の失われた10年から今日まで着実に増え続けている。また、国民年金の対象者でありながら義務づけられている保険料を滞納している人が4割にも達しているが、さらに驚くことは、この中の55%の人が、民間の生命保険や個人年金の保険料を支払っているという事実である。国民が国の社会保障政策を信用していないのは明らかだ。もっともである。国民の多くが行財政改革の必要性に加えて社会保障財源としての消費税引き上げは避けられないと思っている中、総理は「私の在任期間中は、消費税の引き上げはしない」と公言してはばからない。だから自分に引き続き政権を担当させるとは、よくもここまで国民を愚弄したものである。六本木ヒルズや新丸ビルの人出を指して「あの賑わいを見てください。どこが不況ですか」と言い放った小泉総理に怒りを覚える。

マニフェスト選挙は政界に限ったものではない。来年4月に行われる日本医師会会長選挙に立候補を表明した青柳俊日医師会会長は、政策論争を通じた脱従来型の選挙をめざして選挙公約を発表した。政府が世界に誇る医療制度を変質させようとし、米国追従の市場原理主義者が我が物顔で闊歩する今、日本医師会の組織力強化は喫緊の課題である。このための新たな会長は、政策立案能力、先見性、創造性、将来性、行動力などにおいて他候補をはるかに凌駕する青柳俊先生以外にはない。すべての北海道医師会員のご理解と強力なご支援を期待したい。

青柳俊ホームページ：<http://www.hokkaido.med.or.jp/aoyagi/>